

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	謝 冬
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 中国語を母語とする日本語学習者向けの複合格助詞に関する教材開発 —日本語教育文法からの一提案—			
論文審査担当者			
主 査	広島大学大学院国際協力研究科	教授	佐藤 暢治 印
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	深見 兼孝
審査委員	広島大学大学院国際協力研究科	准教授	平川 幸子
審査委員	広島大学大学院文学研究科	教授	高永 茂
審査委員	関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科	教授	于 康
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の目的は、日本語の複合格助詞「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」に焦点をあて、日本語教育文法の観点から、中国語を母語とする日本語学習者向けにそれらの複合格助詞に関わる教材を中国語母語話者の手で開発することにある。複合格助詞「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」は初中級段階で学ぶものであるが、中国語母語話者にとっては習得が難しく、誤用が多いものである。</p> <p>本論文は七章で構成されている。第一章の序論では、研究の背景、目的、意義、研究対象、研究方法、資料、構成を述べている。第二章では、日本語教育文法を「学習者の母語と習得レベルを考慮した記述である」と定義し、従来からある日本語記述文法の成果を踏まえた上で、教育現場に即した日本語教育文法からの複合格助詞研究が必要であることを述べている。第三章から第六章までは複合格助詞「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」をそれぞれ順に論じ、教材開発を行っている。コーパス調査からそれらの前後に来る名詞と動詞、中国で現在使われている主要な教科書三冊における複合格助詞個々の扱われ方と問題点を文法説明、例文、中国語訳などの点から詳細に検討した上で、複合格助詞「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」の扱い方に関する新たな提案を行っている。第七章では結論と今後の課題を述べ、論文末には附録として教室で、あるいは自学の場で使える複合格助詞「にとって」「として(は)」「について(は)」「に対して」に関わる文法ハンドブックが日本語と中国語で収めてある。</p> <p>本研究は、複合格助詞について教育現場が現在抱えている問題点の重要性を理解した上で関連する先行研究を消化し、日本語教育文法という学習者の視点から、現場ですぐに役立つと思われる教材を開発したこと、またそれが今後の日本語教育に大きく貢献できる可能性があるものとして高く評価され、その研究内容は博士の学位取得水準を満たしているものと判断される。なお、本論文の主要な内容は学術論文4編(査読付きで単著)として公表済みである。</p> <p>以上、審査の結果、本論文は、学位請求論文として独創性と確実性を兼ね備えており、博士(教育学)の学位を授与されるに値する内容の論文として認められる。</p>			

